以上、第三九次調査出土木簡は六点であるが、(1)の呪符木簡以外は断片あるいは削屑であり、その性格および内容は明確でない。(1)の呪符木簡については「…嶋如使人」という文字が読みとれ、「急〻如律令」の普遍的な呪符木簡の呪文の使用とどう関係するのか問題である。(2)は左半分が刀子によって削り取られているが、「解文」と判読してよかろう。(3)は食料の授受に関連する内容であり、表面「食」の上は火偏の字である。裏面には月日が書かれており、付札か文書木簡の断片と考えられる。

紹介した資料は一九八四年の出土であるが、多量に出土した木製品の整理のため年度概報では一部写真で報告しただけで、その後一九八五年の木製品整理の段階であらたに確認されたものもでてきたため、ここで合わせて第三九次調査出土木簡としてその概略をまとめたしだいである。

なお、木簡の釈文・内容については平川南氏の御教示を得た。

9 関係文献

秋田市教育委員会『秋田城跡　昭和五九年度秋田城跡発掘調査概報』（一九八五年）

（日野　久）

人面墨書土器

福井・九十九橋（つくもばし）

1 所在地　福井市中央・照手

2 調査期間　一九八四年（昭59）一二月～一九八五年二月

3 発掘機関　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

4 調査担当者　山口　充

5 遺跡の種類　城跡

6 遺跡の年代　江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

九十九橋は、福井城の外堀を兼ねていた足羽川に架かる橋としては、明治初年までは唯一のものであった。また、北陸街道の福井城下への入口にもあたり、さらに水運の面でも、三国湊からの物資の搬入地にあたっていて、川舟改所が設けられていた。

（福　井）

木簡は、橋の改修の工事の際に発見され、同時に橋脚に使用した丸太の根部や石垣もみつかった。木簡や

膳・銭・五徳・庖丁・陶磁器（越前・唐津・伊万里・瀬戸・志野）などは、橋に近い川底と橋の下に厚く堆積していた捨石と流入土砂の中から発見された。

8　木簡の釈文・内容

木簡は二点出土したが、一点は墨痕がほとんど残っておらず、読み取りは困難である。

(1)

・「　□□　問屋九平殿　　木の本村
　　ハセ　問屋喜右□□　　小山吉平
　　舎　フシミ　□〔栄カ〕屋長右衛門殿　　荷主
　　オオツ　堅田屋半平殿
　　カイ□　八木吉左衛門殿
　　弐百五十七　疋田中川安平殿　　」

・「　ツルガ　山下権右衛門殿
　　三国宮腰屋多吉殿
　　フク□　輪違□〔造カ〕□□□
　　戌三月十一日出　大和十市郡木之本村
　　道海安全　小山吉平□」　163×72×16　011

(2)

「　□□屋　□□
　　□□□
　　□□□屋　□□
　　□□□」　225×70×7　011

(1)は、大和国から福井まで運ばれた物品に付けられたものである。大津の堅田屋、海津の八木吉左衛門、疋田の中川安平、三国の宮腰屋多吉は文献史料からその存在がわかる宿の問屋で、この付札が、湖西を通って敦賀へ運ばれ、敦賀からは舟で三国へ行き、最終目的地の福井で廃棄されたことがわかる。

9　関係文献

福井県立博物館『遺跡は語る　ここ20年の発掘成果から』（一九八五年）

（清田善樹）

向日市文化資料館発行
『よみがえる古代の文字
——近畿出土の文字資料が語る都城・郡衙・寺院・集落——』
一九八六年一〇～一一月に開催された特別展示の図録。近畿を中心に集めた墨書土器・木簡・漆紙文書等発掘された文字資料のハンディな史料集になっている。
（B五版、三二頁、一九八六年一〇月、頒価三〇〇円、〒二〇〇円、〒617京都府向日市寺戸町南垣内四〇の一　向日市文化資料館）